

遊びは非認知能力を育む

—アタッチメントは子どもの心の土台を形成する—

園長 山崎立哉

6・7月号で、非認知能力で育む大切なことは「大人のかかわり」と「遊び」であることをお伝えしました。その大人のかかわりの中で「アタッチメント」という言葉を紹介しました。

このアタッチメントという言葉は「くっつく」という意味です。子どもたちは、いつでもお母さんに「抱っこして！」とくっついてきます。このいつでも抱っこしてくっついて離れない状態に出来ることが、子どもたちにとってとても大事なことです。もし、生まれたすぐから抱っこせずに育てたら、子どもが「抱っこ！」と言っても抱っこを拒み続けたらどうなるのでしょうか？それは、子どもの身体と心が成長できないことがわかってきました。人間の脳は乳児から6歳までに大人の90%まで発達します。この間に非認知能力といわれる自己と社会性の力が発達します。自己とは、自分を大切にし、自分を律し、自分を高めていくための力のことです。社会性の力とは、集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力のことです。このアタッチメントがないと成長どころか脳が委縮してしまい、自己と社会性の力の発達に大きなダメージを与えます。

子どもたちは、生まれてから無条件で抱っこを受け入れてもらえることの毎日の経験が、この自己と社会性の力を育てます。特に自己とかかわる心を育てるには「人から愛してもらえるんだ！人は信じることができるんだ！」という感覚を子ども自身が持つことが最も大切なことです。この「人を信じる力」は、人間が生まれて一番最初に身につけておくべき心です。

この非認知能力（自己と社会性の力）は、家庭ではお母さんがいつもいてくれることで、こども園では先生がいつもかわらずにいて子どもに寄り添うことで育てます。本園が育児担当制をとっているのはその為です。いつも同じ先生がいて相手をして、子どもが困ったとき、不安そうなときはその子の傍に行って寄り添い、「ギァー！」と泣いたときはしっかり抱きしめてくれる、そういう先生がいることが、子どもの心の土台をしっかりとつくることになり、こども園を卒園した後の教育効果もとても大きいことがわかってきたのです。このアタッチメントが如何に大切なのかご理解いただきたいと思います。